

---

# 2人で1人の勇者様

ハル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2人で1人の勇者様

### 【Nコード】

N7364Y

### 【作者名】

ハル

### 【あらすじ】

桜庭優と紅葉穹は両親がおらず、2人ぐらし。そんな2人が家を出たら異世界に召喚されて勇者になっていた。1人は精霊魔術師、もう1人は大魔術師となり2人で1人の勇者となる。名前だけ勇者は魔術学校に通い、そこと日常での、ほのぼのバトル展開をお楽しみに。最後に説明下手ですいません。

## 召喚（前書き）

まずはじめに、こんな小説を読んだけいただき、ありがとうございます。

## 召喚

入学式に行こうと家を出た、桜庭優さくらば ゆうだ。そして今、親友の紅葉穹あかば そらは家から出た瞬間に、目の前が真っ暗になり、目の前に変なオッサンがいた……。

「なあ穹、俺達って……入学式に行く途中だったよな？」

「そうだね。僕達は普通に家を出たら、ここにいたと思うよ」

そう2人はいつも通りに一緒に家に出て、今日から始まる高校の入学式に参加しようとしていたのだ。

それが、何故こうなったのかは2人に全く心当たりが無かった。

「君達が異世界から来た者達か？」

2人にとっては、目の前のオッサンが話してる意味など言葉は分かっても、全く理解していないだろう。

「あなたが言っていることが全く理解できないのですが」

穹の言葉にオッサンが少し考える。

「お父様、いきなり召喚されたのです。状況が飲み込めてないと思います……」

「おおそうだった。いきなりここに召喚したんだ。混乱するのも無理はない」

オッサンの隣には、いかにも王女様と思われる美少女が座っていた。その容姿は長い銀髪に翡翠色の目、それにその思わず見惚れてしま

うほどに整った顔が印象的だった。

と言うことは、オッサンはもしかしたら国王様なのかもしれない。

「ここが日本でないなら、僕達が異世界から来た者だと思います」

こういう時の穹は冷静に物事を考えられる。

それとは逆なのが、その隣にいる優だ。

「なら、君達が異世界から来た者だ。ここはスビル王国。君達の日本と言う国は聞いたことがない」

「話は変わりますが、僕達はどうして異世界に召喚されたのですか？」

穹はあまり感情を顔に出さない場合が多い。そして、今も顔に出さずに冷静を装っている。そんな穹の心情が分かるのは、生まれてからの、ほとんどの月日を過ごした優だけだ。

「うむ、それも話さなくてはならないな」

「つまり、君達は勇者として召喚されたんだ」

「はい？」

優と穹は声を揃えて答える。これも、過ごした月日が成せる事だろう。

「勇者と言うのはな、戦争にならないための抑止力としての役割がある。勇者として異世界の者を召喚するのはこの国だけだが、どの国でも勇者は最強の名を有する」

2人は言葉に詰まる。脳の処理能力の方が追いつかないのだ。

「つまり、俺達は戦争の時には戦うけど、それ以外ではただの勇者って称号持つてるだけってことですか？」

「そついう風に捉えてもらってもよい」

「でも勇者が2人つてのはどうしてなんですか？勇者って普通は1人だと思うのですが」

そう、普通は勇者は1人。漫画やゲームの世界では勇者は1人しかないだろう。

「君達2人で勇者だからだ」

王様の答えは2人で1人の勇者らしい。

2人で1人と言うのは、中学卒業と同時に2人だけで生きてきた2人にとってピッタリな言葉だ。

「それで、勇者を引き受けてくれるか？」

この質問に対する答えは決まっている。断つても元の世界には帰れないだろうし、無理矢理にでも勇者にするだろう。

「いいぜ！」「分かりました」

返事に2人の性格が現れてるが、これが2人なのだ。

それに、2人とも勇者と言うのは満更でもない。

活発的な優はともかく、それとは対照的な穹までもが…。

「では、勇者の腕輪を」

どこからか魔術師のような格好の男が来ていて、手に持った盆の上の腕輪を差し出してくる。

「それは、その国の勇者にしか着けられない。それも勇者の人数分だけ用意されるらしい。今までは1人しかいなかったが、今回は2人で1人だからな」

王様が笑いかける。それを無視して2人は腕輪を手取る。触れた瞬間に激しく光り、いつの間にか優と穹の手首には腕輪が着いていた。

「その勇者の腕輪は所有者の望む形状に変化し、その能力を発揮できる。あとは、腕輪が教えてくれるとしか、書いていない」

王様は先代の勇者が書き記した本に書いていたことを述べる。

「それでは2人には魔術学校に入り魔術を学んでもらう。それまでに初級魔術を娘のフェルミに習いなさい」

王女のフェルミがこちらに一礼してから近づいてくる。

「あ、あの、よろしくお願いします」

優の手を握って挨拶する彼女の表情を見れば、今の彼女の心情が手に取るように分かるだろう。

「優、いきなりフラグ立てるところは流石だよ」

優も穹もかなりのイケメンだ。2人とも自覚はしていないが、お互いがモテることは理解している。

「えっ、フラグなんて立ってないだろ？」

自覚なしの優にとっては、いつも通りの反応だし、この光景も特別珍しいというわけでもない。

「それでは、今日はゆっくり休んでください。明日から、この国の地理や歴史、魔術と簡単に教えるので」

「はい」「分かりました」

優は気のぬけた返事で、穹は事務的に返事をする。

## 召喚（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします。

## 契約

異世界に召喚された日は、フェルミが2人を城の中を案内した。そして2人はと言えば、城で出た見たこともない料理、フカフカすぎるベッドを堪能したのだった。

「優さん、穹さん、早く起きて下さい」

フェルミが直々に2人を起こしに来る。本来の客人は起こしに行かないし、王女が行ったりなどするはずがない。

つまり、異世界から来た人物、あるいは勇者とはそれほどの存在だと言っただ。

ただ、今回の場合は少し意味が違う。

「早く起きて魔術の練習をしないと、入学式までに初級魔術もできませんよ?」

そう、一週間後は魔術学校の入学式で、初級魔術から始めるが、それぐらいは出来て当たり前なのだ。

「…………おはよう」

穹が先に起きる。

だが、その隣のベッドで寝ている優は一向に起きる気配がない。

「……」

「いつてえ！穹、何すんだよ？」

穹が布団をめくって、太ももを思いつきり抓ったのだ。それは尋常じゃない痛さだっただろう。

「優が起きなかったからね。ちょっとしたスキンシップだよ」

「限度つてもんがあんだろ！」

「起きない人が悪いんです」

穹は意外と子供っぽい一面もある。今回がいい例だろう。

「あのお、食事が終わったら、魔術の練習をしたいのですが……」

「りょーかい！」「分かりました」

恐る恐ると語り掛けるフェルミに、2人はそれぞれの返事を返した。

朝食を取りながら、フェルミが予定を話し終わる。

「じゃあ、朝と昼は魔術で、夜は歴史と地理を日にちごと。ってことよろしいですか？」

「はい、それで間違いありません」

穹が事務的に質問し、それに、フェルミも答える。

穹は基本的に馴れない相手には、敬語や余所余所しい態度を取って

しまうのだ。

「魔術ってどんなのをやるんだ？」

「まだ説明してなかったですね」

魔術には、いくつか種類がある。

魔法、精霊術、この2つを纏めて魔術と呼ぶ。

魔法は自らの魔力を使い、不可能を可能にする力。

例えば、何も無い場所から火を生み出すことも、不可能なことを可能にしたという捉え方もできる。

次に精霊術は、自らの魔力を使い、精霊を召喚する力。

例えば、火の精霊を召喚し、その力を剣に纏わせたりできる。他にも精霊を使って魔法紛いのこともできる。上位の精霊になると、その精霊の属性の魔法を打ち消すこともできる。

魔法は発動が早いのと、応用が効く。

精霊術は威力が大きく、上位精霊にもなると天災のようなことも起こせる。

お互いに利点があるので、どちらの方が優秀と言っわけでもないので、今の時代まで生き残っているのだ。

「と言っわけです。何か質問はありますか？」

一通りに魔術のことを説明したフェルミに、優が手を挙げる。

「はい、ユウさん」

フェルミの顔が少し赤い。やはり一目惚れをしていたらしい。

「魔法と精霊術は分かったが、両方使えたりするのか？」

「基本はどちらかしか使えません。ですが、歴代の異世界から来た勇者の方々は、両方使えたりらしいですよ」

「じゃあ、俺達も両方使えるのか？」

「それは、そうなんではないでしょうか。ちなみに私は魔法の方を使います。それと、精霊術師は数がそんなに多くないので、魔法使いの方が多いいんです」

ここで穹が手を挙げる。

「あの、精霊って……契約とかいるの？」

「契約は必要ないはずですよ。呼べるか呼べないかですしね。あつ、精霊王と上位の精霊は契約が必要らしいですよ」

「なら、僕は使えると思います、精霊術」

「どうゆうことか説明して頂いても？」

さっきは両方使えるかとは言ったが、両方使える人間を見たことがないので、少し信じきれない部分があるらしい。

優が言っていたら、信じてたかもしれないが……。

「昨日の夜に夢を見たんです」

「内容を話してもらっても？」

穹は小さく頷く。

『小僧、力を求めるか？』

真っ白な空間にいる穹は、目の前にいる女の子から質問を受けた。

女の子は、見た目的には同じ年くらいだが、その内側に大きな何かを感じる。それが精霊王の魔力なのだが、穹には未だに正体が分からない。

『小僧、力を求めるか？』

「同じ年くらいなのに、小僧はやめてもらえますか？」

同学年の女の子に小僧と呼ばれて、いい心地はしないだろう。

だが、白くて長い髪に、赤い目、そして整った輪郭の彼女には、その言葉が可笑しかったのか小さく笑みを浮かべる。

『小僧、精霊王である私に、そんなことを言ってきたのは小僧が初めてだ』

「そりゃどうも」

『小僧は、力を望んでここに来たのだろうか?』

「貰えるものなら、貰っていきますよ」

『何のために力を望む?』

穹は少し考える。

「今の僕にとって大切なものは、親友で家族の優だけです。ですが、これから大切なものが増えても、僕が守れるぐらいの力は欲しいかな」

『つまり、他人を護るために力が欲しいのか?』

「そういうことです」

『おもしろい。ならば、私が小僧と契約してやる?』

「けっこうです」

予想外の答えに精霊王が固まる。

『では、力がいらぬのか?』

「それはいいります」

『だから、精霊王の私が力になってやる?……』

「分かりました。で、僕はどうすればいいんですが?」

『私と契約するから、手を出してくれ』

「はい」

『精霊王オーベロンは、此の者を契約者と認める』

簡単に言うと、精霊王オーベロンの体が光り、その光りが穹の右手の中指に集まり、その場所に指輪ができる。

「これって、どうなってるんですか?」

『私と契約したから、指輪になって、小僧と行動を共にするだけだぞ。必要なだけの魔力を流してくれると、実体化して戦うこともできる』

「うーん、とりあえずは分かりました」

「と、まあ、そんなことがありました」

「それって凄いことですよ? 精霊王の契約者なんて、100年以上出てきてません」

「あっ、やっぱり夢じゃなかったんですね」

「くそう、俺が精霊王狙ってたのに」

優が本気で悔しそうにする。

「僕の勝ちだね、優」

「大丈夫ですよ、ユウさん。精霊で負けても、まだ魔法があります」

「…そうだな。魔法で穹より凄いの使えばいいのか」

「はい」

すぐに立ち直った優に、すぐさまフェルミは返事をする。

## 契約（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りだと評価お願いします

## 初級魔法

「では、魔術の基礎を教えます」

「はい」「お願いします」

優は幼稚園児のような返事を返し、穹は丁寧に返事を返す。

「まず私は魔法しか使えないので、精霊術のソラさんはイメージだけ掴んでください」

魔法にはいくつかの属性がある。

代表的なものが4大属性の火、水、風、土がある。

それとは別に光、闇、雷、氷、無属性がある。

それぞれの属性には、初級魔法、中級魔法、上級魔法、最上級魔法がある。

例外として、無属性魔法にレベルはない。

そして、精霊術にもいくつか決まりが存在する。

精霊王を頂点として、火、水、風、土、光、闇、雷、氷の上位精霊が存在する。

下位、中位の精霊は呼び出しても実体化しないが、上位精霊になると実体化する。

そして、上位精霊になると呼び出すのに、合意が必要になる。ゆえに悪人が上位精霊を呼び出して天災を起こそうとすることはできない。

それぞれの属性の精霊は、その属性しか使えないが、精霊王のみ例外として、それぞれの属性を中位精霊ぐらい使えて、更に分解と再

生を使うことができる。そこが精霊王と呼ばれる所以である。

「魔法と精霊術の説明は以上です。そしてまずは精霊術ですが、教科書通りに言わせていただくと、上位精霊を呼び出すには精霊の名前を、下位と中位の精霊を呼び出すには頭の中でイメージするだけで大丈夫です。私は精霊術は使えないので、ここまでしか分かりませんが大丈夫ですか？」

「はい。方法さえ分かれば、後は僕が自分でやりますから」

「魔術学校に入れば専門的な部分も教えてもらえるので、続きは学校で教えてもらってください」

「分かりました」

申し訳なさそうに言うフェルミに、穹は優しく笑顔で答える。

「まずは初級魔法から入るので、右手を前に出して掌の上に炎の球体をイメージして下さい」

「おおーすげー」

掌の上には炎の球ができていて、それを見て興奮している。

「ユウさん、さすがは勇者ですね」

「……できない」

「「えっ……」」

フェルミと優の声が重なる。そして声の主である穹の方を見る。

「なあ穹……できないって……これがか？」

「うん」

「それって……センスないんじゃない？」

「だよな」

穹がさつきよりも落ち込む。

「なあフェルミ、苦手な属性だから出来ないとかってあるのか？」

「そりやたしかに上級魔法にもなれば得意属性しかできませんが、初級魔法は魔法が使える者なら誰でも使えますよ」

「じゃあ、俺は精霊術が、穹は魔法が使えないってことなのか？」

「普通の人はそうです。あと、事実としてソラさんに魔法が使えるいので、おそらくはそうだと思います」

「だってさ。穹は精霊術しか出来ないらしいぞ」

「魔法のセンスはないんだよね」

穹がどんどん落ち込んでいくので、すかさずフェルミがフォローに入る。

「精霊術はこの世界で最強になれる可能性があります。それで充分

「じゃないですか」

「世界最強……いいね」

穹がだんだん元気になっていく。

「優、精霊術を極めて、精霊術で魔法に勝つよ」

「望むところだ」

「じゃあ、僕は離れたところで練習してるよ」

「ああ」「あつ、はい」

穹が離れたところに行く。

「では続きですが、次は掌から水球を出してみてください」

その後も練習は続き、初級魔法は全属性一回目で使えるようになった。

次からは中級魔法も習うらしい。

魔法の練習も終わり、王宮にある2人の寝室

「なあ穹、精霊ってどのへんまで出せた？」

「僕は下位の精霊なら全種類出せたと思うよ」

「初級魔法は全ていけたから、俺と同じか」

「じゃあ優には魔法のセンスがあるんだね」

「魔法使いはけっこういるらしいからな、その中でトップってどうやったら分かるんだ？」

「最上級魔法を全属性使えたら最強なんじゃない？」

「たしかにそりゃ最強だな」

「あつても、最上級魔法つて4大属性しかまだ確認されてないらしいよ?」

「じゃあ、他の4つも俺が作れば歴史上最強だな」

「だね」

「じゃあ、寝るか」

「そうだね」

その日から魔法の練習をして、優は全属性の上級魔法まで、穹は4大属性の上位精霊まで呼び出せるようになった。

そして、魔術の練習ばかりしていたので、地理や歴史を全く勉強してないことに気づいたので、魔術学校入学の一週間から猛勉強することになった。

## 初級魔法（後書き）

ただひたすらに魔術学校の話が書きたくて、超展開にしてしまったことを、今この場を借りてお詫びします。

誤字・脱字・質問があれば感想欄まで願います。  
評価、感想、お気に入り登録よろしく願います。

## 入学式

「なあ、入学式って普通は4月じゃないのか？」

「4月だと毛虫が出るから貴族が嫌がるんじゃないかな」

「あっ、そうだな」

「えっ普通は5月じゃないんですか？」

入学式に行こうと王宮を出て、魔術学校までの道のりを歩く途中、優と穹の会話にフェルミがつっこむ。

「僕らのいた世界では4月にやるんだよ」

穹のは初めて会った人や、信用でしない人には敬語を使う。だが、フェルミとも半月以上の付き合いなので、敬語ではなく優に使うものと同じような口調になっている。

「珍しいですね」

「俺らからしたら、こっちのが珍しいんだけどな」

「そんなものですか？」

「そうだよ。それに僕達は入学式の日こっちに来たからね」

「そっいえば勇者の仕事って何かあるのか？」

「そうですねえ……」

優の問いかけにフェルミは少し考えるような仕草をする。

「ありません」

「「えっ!?!」」

「どうしたんですか?」

「いや、仕事がないなら、どうして呼んだの?」

「仕事はないですが、戦争を起こさないための抑止力にはなりません。勇者を相手にするだけでも、敵国の戦力はかなり落ちますから。それに、この国の勇者は一国の兵士が全員かかってきても勝てる。つて有名ですから、名前だけの勇者がいればそれでいいんです」

「名前だけでいいなら、別に召喚しなくても他の奴使えばいいんじゃないかったのか?」

「それはダメです。4国合同の魔術大会とかの国交を深めるイベントには勇者の参加が絶対です。その場で中途半端な人物を出しては、国の威信にかかる問題になります」

「そうゆうもんなのかね」

「じゃあ、他の国の勇者も召喚してるの?」

「他国の場合は、国内から選んでるらしいです。魔術大会での優勝者、王族の中で一番腕の立つ者、貴族院の話し合いで決定していま

すね。そして、その勇者はそれぞれが勇者の武器を持っています」

「僕らの腕輪も武器なの？」

「勇者の腕輪は変形する武器です。使い手の望む形態に変化します。そして、使い手の魔術を纏わせることも可能です。私は見たことありませんが、先代勇者は剣に魔法を纏わせてたらしいですよ」

「これってそうやって使うのか」

勇者の腕輪を見ながら言う優に、フェルミは驚愕の表情を向ける。

「もしかして知らなかったのですか？」

「うん」

「腕輪はどうして使い方を教えてくれなかったのでしょうか」

「本当は教えてくれたりせずに、知ってる人から聞いて使うのかもね」

「だな」

「残念ながら、私もそう思います」

15分ほど歩いたところで、大きな建物の前に到着する。大きさは大学くらいあり、敷地もそれくらいはある。

「どこか？」

「そうですね」

「でかいなあ」

「来るのは初めてですか？」

「王都から出たことないし、仕方ないじゃねえか」

「確かに外出しませんでしたね」

フェルミが顔を背ける。

これは、後ろめたいことがある者の態度だ。

「フェルミ？どうした？」

「いえ、何も」

「優、やめたげなよ。フェルミは僕達のカリキュラム設定をミスったことを、突かれるのが嫌で顔を背けてるんだから」

「ああ、そうか」

「分かってるから言わないで下さいよ！」

フェルミは涙目になりながら抗議する。

「いやあ、ついね？」

「ついね？じゃありません。ソラさんの性格がこんなに悪いとは思いませんでした」

「あー、穹の奴は基本的に猫被ってるからなあ。本性を出すってことは、フェルミが信用されてるってことだ」

「……それなら許しますけど、言葉には気をつけて下さいね」

「フェルミも無理のない計画をね？」

「あああああ、聞こえませんが。私は何も聞こえません」

フェルミはまるで小学生のような反応をする。

校内に入り、入学式の会場らしき場所を探すが、正門からは少し距離があるらしい。

「あつ、じゃあフェルミの好きな人言っちゃうよ？」

「嘘です。すみません」

「なあ穹、フェルミの好きな人って誰なんだ？俺の知ってる奴か？」

「知ってるって意味なら、よく知ってると思うよ」

（本人なんだし）

「俺のよう知ってる奴って穹ぐらいしか知らねえぞ。ってことは穹か？」

「相手が僕なら、フェルミがこんなにバラされるのを、恥ずかしが

らないと思っけどね」

「それもそうだな。まっ別にいつか。俺には関係ねえし」

「……むしろ重要人物です」

「ん？何か言っただか？」

「なんでもありません！」

「俺なんかしたか？」

「うーん……強いて言うなら、乙女心を踏みにじった、かな？」

「とりあえず、悪い」

「そんな誠意のない謝罪はいりません」

「じゃあ、俺にどうしろと？」

顔を真っ赤にしながらフェルミは手を差し出してくる。

「……会場につくまで、手を繋いでくれたら許してあげます」

「ん？そんなことでいいのか？」

「はい」

手を繋いだ優の顔も真っ赤になっている。

それを見て穹はニヤニヤとニヤつきながら、2人を見る。

(そういえば、女の子と手を繋ぐのって、小学校以来じゃないか？  
こんなに緊張するもんだっただけな)

(うう、どうしてユウさんは、そんなにいつも通りなんでしょう。  
これじゃあ、私になんて全く興味なしじゃないですか)

「……………」

「……………」

(ヤバイ、この緊張で、この静かさは精神的に辛いぞ。何か話題を、  
何か話題を。穹の奴、楽しんでないで、何か話せよな)

優は穹にアイコンタクトで、何か話せとの意図を伝える。さすがに  
人生のほとんどもを共に過ごしてきたからか、穹は何を伝えたいのか  
を理解する。

(何も話さなかったら、緊張してるのが伝わってしまうのではない  
でそうか。何か話題を……………。でも、いきなり手を繋がせたりしたら、  
いくら鈍いと言っても、そろそろ私の気持ちを気づいてくれてもい  
いですよね)

真っ赤になりながら手を繋いでいる2人を、穹はニヤニヤしながら  
見つめる。まるで、悪戯でもする子供のような笑みで。

「なんだかそうしてると、カップルみたいだね」

「……………」

「……」

フェルミが顔を真っ赤にして俯いてしまう。優は穹を怒りの形相で見る。

それに穹は悪戯が完了した子供のよ様な笑みを浮かべる。

（穹の奴、この場面での今の発言は地雷だろ？フェルミがかなり怒ってるじゃねえか）

（ソラさんはいったいどこまで私の心を抉れば気が済むんでしょうか。ユウさんもソラさんをあんなに睨みつけて、そんなに私とこ、恋人扱いされるのが嫌だったのでしょうか）

「ねえ2人とも、……もう付いたけど？」

「じゃ、じゃあ」

「は、はい」

優の方から切り出して、手を離す。

（あ、あぶなかったぜ。それより穹が何をしたいのか全く分からないんだが……）

（うう、やっぱり私は優さんに、女の子として認識してもらってないんですね。でも、私は諦めません。いつか絶対、私に告白させてみせます）

優は冷や汗を拭い、フェルミは決意を新たにして、ガッツポーズする。

そして、長つたらしいと思わせて、それほど長くもない校長の挨拶を聞き、入学式は終了する。  
ちなみに、優と穹とフェルミは同じクラスになったが、それはどこの国の、どこの王様が手を回したからだとは、3人とも知るよしもなかった。

## 入学式（後書き）

なんかラブコメ展開にもっていかれそうですが、魔術学校での話は、恋愛：魔術戦闘を1：1または、3：4ぐらいにしようと思っ  
ています。

まあ、他の作品よりはラブコメ寄りってぐらいですかね。

あつ、あと昼ドラ的展開とかは予定してないです。むしろやるつもりはないです。

まあ、その時の気分にもよりますが……。

あと、作者がハッピーエンドを望んでるので、悲しいヒロインは出さないつもりです。

最後に

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## クラスメートと班決め

「えーっと、桜庭優です。趣味はなし。優って呼んでくれ」

「ユウさんは貴族じゃないことになってるんで、苗字はいりません」

「えっそうなのか？……優です。以上」

フェルミが自己紹介に小声で指摘してきたので、言い直す。

言い直した後の自己紹介で穹が苦笑いを浮かべる。

「穹です。優とは兄弟みたいなものです。よろしくお願いします」

穹が丁寧に自己紹介をして、その後も数人続き、優の隣に座るフェルミも無事に自己紹介を終える。

「じゃあ、今から訓練合宿の班を決めてもらいます。自己紹介も終わったことですし、各自がコミュニケーションを取って、6人の班を作ってください」

真面目そうな女性の担任の指示で6人班になることになる。

それぞれ数人は見知った顔があったのか、そちらに声をかける。

「じゃあ、俺達3人は確定ってことでいいかよな？」

「僕は問題ないけど、フェルミは王族だし、貴族の人と組まなくていいの？」

「お父様はそれなりに面識がありますが、私はパーティーなんかでの上辺だけの付き合いです。それほど親しいわけではありません。あつ、でも、幼馴染の子はクラスにいますね」

「じゃあ、呼んできたら？」

「そうします」

クラスのほとんどが立ち歩いて話しているが、優達は席を立たなかつた。それはフェルミ以外にこの世界で面識のある人物がいらないからだ。

そこに、1人の少女が歩いてくる。

「あつ、あの、あなた達も平民出身ですよね？」

「『も』ってことは君も？」

「そ、そうです。それで、……平民通し同じ班になれたらなあ、って思っています」

胸に掛かるか、掛からないぐらいの茶色の髪に、フェルミほどではないが整った顔立ちをした小柄な少女が話しかけてきた。

「このクラスに平民って俺らだけなのか？」

「あつ、はい。他は貴族の方が、それに使える方のみで、完全に平民は私達だけです」

平民でも貴族の援助を受けて、将来はその家に仕えることもある。目の前の少女以外の平民は皆そのようにして、魔法学校に通っている

るのだろつ。

「僕はいいけど、優は？」

「いいんじゃないか。フェルミも賛成すると思うし、名前……なんだっけ？」

「あつ、すみません。わたしはエリンっていいいます。ユウさんとソラさんですよ。」

「はい、合ってますよ。それでエリンさん。貴族の援助なしで、どうやって魔術学校に通えてるんですか？」

「それはですね……商人をやってる家系なんですけど、貴族よりの平民なんで蓄えはわりとあるんですよ。それに私は家を継げませんし、魔術の才能がありましたから、魔術師として生きていこうと思ったんです」

「そうでしたか。突然聞いたりして申し訳ありません」

「いえいえ。では、そちらはどうやってなのですか？」

「あー、俺らはな？」

「うん」

エリンの背後から来る2人の人物を見て、2人とも説明に困る。

「ユウさん、ソラさん、連れてきました。ん？この子は誰ですか？」

「新メンバー」

エリンを見ながら言うフェルミに、2人ともフェルミを見ながら答える。

「うえ!?!」

何を言いたいのかわからない声を漏らしながら、エリンはフェルミの顔を見ながら慌てる。

「あつ、そうでしたか。これからお願いしますね」

「こここ、こちらこそよろしくお願いいたします王女様」

「そんなに緊張しないで下さい。あと、私のことは気軽にフェルミって呼んでください」

「そそそ、そんな恐れ多い。お、王女様を呼び捨てになどできません」

「私は気にしませんのに……」

エリンの反応を楽しんだ後に、優が声をかける。

「ってことで、俺達は王様に援助されてるんだ」

「こここ国王様に!?!わたしは何と凄い方に声をかけてしまったのでしょう」

「僕ら自体は凄くないですよ。それに、僕らは王様に保護されてる

みたいなもんですから」

「そ、そうなんですか」

エリンがホツとして胸をなでおろす。

さつきから慌てているエリンが小柄な体軀からか、どうも幼く見え  
てしまう。

その様子をフェルミの後ろから顔を覗かせる少女が見ていた。

「ねえねえフェルミ、あんたの本命はどっちなの？」

「アイラ!? な、何を言ってるのよ!」

「えっ、だって2人とも凄いカツコイイじゃない。で、どっちが本  
命なの?」

「言いません!」

顔を赤くしたフェルミが拗ねて顔を背けてしまう。

穹は面白がって、優にバレないように優の方を指差し、それに気づ  
いたアイラが優を見てニヤニヤする。

「それで、その子がフェルミの幼馴染か?」

「あっ、うん。私はアイラ・クリスティー。王国の魔術騎士団の団  
長の娘で、フェルミの幼馴染よ」

「俺は優で、こっちは穹だ。あと、その子がエリン。よろしく」

「こっちこそよろしくね。でも、あと1人足りないわね」

「誰か呼んでくれるか？俺らは知り合いいないから」

「うん。分かった」

この、赤い髪を肩に掛かるか掛からないかぐらいの長さにしていて、整った容姿の中性的な雰囲気をかもし出してる少女がフェルミの幼馴染のアイラらしい。

アイラは教室中を見渡して、すでに4人ほど男子が集まったグループの中に、目的の人物を発見する。

「ヒューイ!!」

「アイラさん!？」

「あなた、婚約者なんだからこっちの班に来なさい!」

「無茶言わないで下さい。自分はまだ班を決めてますから」

「うん、分かった。でも、こっちの班に来なさい」

「分かってないじゃないですか!」

「分かるのと納得するのは別よ。いいから来なさい」

「はあ、そう言うことらしいので、すいませんが失礼します」

ショートカットの金髪に、どちらかと言うとイケメンの部類に入る青年がアイラの婚約者のヒューイ。

ヒューイはメンバーに出て行くことを伝え、アイラ達のいる方まで

とぼとぼと歩いてくる。

「じゃあ、これで6人揃ったな」

「けっこう無理矢理感はあるけどね」

「うう、わたしだけ立場が変です」

「私達は気にしないから大丈夫ですよ」

「そうだぞ、あたしから見たらヒューイの方が立場ないから」

「それってどういう意味ですか？あつ、自分はヒューイ＝フラムステイドです。長いのでヒューイとお呼びください」

優、穹、エリン、フェルミ、アイラ、ヒューイの順で言う。

そして、誰もヒューイの突然の自己紹介には何も言わず、そっとしてあげている。

「意外と強そうだね」

「確かに、ユウさんとソラさんがいれば心強いです」

「いや、フェルミ、ソラは強いが、俺はまだフェルミに勝てないと思うぞ」

「そうですか？私はユウさんが本気になれば負けると思いますが」

「知り合い相手に本気で戦えないから、今は負けてるな」

2人で話し始めたところに、アイラがニヤニヤしながら入ってくる。

「公共の場でイチャつくな！」

「い、イチャついてなどありません。アイラはいつからそんなに面白いジョークが言えるようになったのですか？」

「ジョークねえ？フェルミはユウのこと好きなの？」

「そ、そんなこと言ったらユウさんに失礼です」

「ふーん、否定はしないんだ」

「そろそろ虐めるのは可哀想ですよ？」

アイラはニヤニヤしながらからかっていたが、同じくニヤニヤした穹に止められる。

フェルミは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「フェルミ様がユウ君を好きで、アイラさんがヒューイ君の婚約者」

エリンは小声でぶつぶつと状況を整理している。

周りから見たら今のエリンは小動物を連想させて、かなり可愛いだろつ。

「あー、何この可愛い生物。食べちゃいたい！」

「ア、アイラさん!？」

「いいじゃない、いいじゃない。女の子同士なんだからさあ」

「いけませんよ!」

アイラは可愛いもの好きなのか、エリンに抱きついている。

「自分は目立ちませんが。頑張るのでよろしくお願いします」

「あっ、うん、頼む」

無理矢理連れてこられたことに、半ば開き直ったヒューイが優によく分からないアピールをする。

「意外とこのチームだと何とかなりそうだね」

「だな」

優と穹はそれぞれクラスという空気に懐かしさを感じるのだった。

## クラスメートと班決め（後書き）

次回からは訓練合宿でキャンプ行きます！

先に目的を言っておくと

- 1、クラスメートとの親睦を深める。
  - 2、クラスメートの实力を知り、より精進しようと努力すること。
- ですかね

ってことで、読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7364y/>

---

2人で1人の勇者様

2011年11月25日18時46分発行